
のぞむくんのチューリップ

かみたか さち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のぞむくんのチュールリップ

【Nコード】

N6291R

【作者名】

かみたか さち

【あらすじ】

体育館前の階段に座り込んで一日ぼんやりしている、のぞむくん。秋に植えたチュールリップの芽が出ていることに気がついたのぞむくんは、少しずつ、元気を取り戻します。地震被災地の方たちに、早く笑顔が戻りますように。 <Smile Japan>企画参加作品。

(前書き)

一日も早い復興を祈って書きましたが、一部、悲しいお気持ちになる描写になっているかもしれません。

体育館前の階段に、のぞむくんはすわっていました。

足元のしめった土を枝の先でひっかき、絵のような、絵ではないようなものを書いていきます。

お昼からずっと、そうしていました。

空気が冷たくなったころ、となりにだれかがすわったのが分かりました。でも、のぞむくんはじっと土を見えています。

土の表面が、さあつとあかね色にそまりました。

「うわぁ、夕焼けだぁ」

となりのだれかが言いました。その声につられて、のぞむくんも顔を空へ向けました。

本当に、きれいです。うすい水色の空に、あかね色の雲がふんわり浮いています。お母さんがよく、見て、きれいよ、と教えてくれたものです。

のぞむくんの目に涙があふれて、空がかすんで見えました。

「明日も、晴れそうだね」

となりにすわった人が言っています。のぞむくんは、そっとそちらに目を向けました。

のぞむくんと同じ、一年生くらいの子どもです。

まだ寒いのに、半そでと半ズボンです。おまけに、かみの毛はすごく短いです。

寒くないのかな、と思ったけれど、のぞむくんはだまって、また下を見ました。

夜になって、のぞむくんが毛布にくるまってひとりで寝ようとする、となりにまた、あの子が来ました。

「ここで寝ていい？」

のぞむくんは、返事ができないまま、しっかりと毛布をつかんで、かたい木の床に寝転がりました。

ぎゅうつと体を丸めていると、背中がほんわり温くなりました。背中あわせになって、あの子がひっついて寝ているようです。

体を思うように動かせないけれど、のぞむくんは少し安心して、ここにきてはじめて、しっかりと寝ることが出来ました。

次の朝、おにぎりを持ったまま、また体育館前の階段で土を見ているのぞむくんの耳に、あの子の声が入ってきました。

「うわぁ、かわいい」

声の方に顔を向けると、あの子が入り口近くの道具置き場のすみへしゃがんで、地面を見えています。

のぞむくんがぼんやりおむすびをかじると、その子が、ひよつとのぞむくんを見ました。そして、どきりとしているのぞむくんに、

「見て」と言って、青いシートの下を指さしました。

おそろおそろ近付いてのぞきこむと、そこには、赤色交じりの緑色をした、とがった小さなものがあります。かたい土から顔をだした、チューリップの芽でした。

よくよく顔を低くしてさがすと、チューリップはあちらこちらに芽を出しています。全部で、十個くらいでしょうか。

のぞむくんは、知っていました。チューリップが、全部で二十七个植わっていることを。一年生の数だけ、球根が植えられたことを。でも、芽が出ているのは、十個です。

じわりと、のぞむくんの目に涙がにじみました。

その時、

「ちよつとどいてね。荷物を置くから」

と、大きな包みをついだ、オレンジ色の服を来たお兄さんがのぞむくんの後ろに立ちました。

のぞむくんはとっさに立ちあがって、

「だめ！」

と、両うでを広げました。ふしぎそうに首をかしげたお兄さんの顔は、おこっているようにも見えて、のぞむくんの手の先はふるえましました。

冷たくなった手を、ふわりと温かいものが包みます。あの子が、のぞむくと手をつないで、にっこり笑っていました。

のぞむくんは勇気を出して、お兄さんに言いました。

「チューリップ、あるの。秋に、みんなで植えたの」

「え？」

お兄さんは荷物を足下に置いて、のぞむくんが必死に指さす方をみました。

「ああ、本当だ。チューリップだ」

お兄さんが、ほろりと笑いました。同じように荷物をかついで来る緑色っぽい服のお兄さんに、お兄さんは言いました。

「ここ、チューリップがあるんです。だから荷物は、もう少し向こうに置きましょう」

お兄さんも、並んだ芽を見て、ヒゲだらけの顔をしわだらけにしました。

「おうおう。がんばって出て来たんだな。後から来たもんがつぶさないように、さくで囲っておくか」

のぞむくんは、どきどきしました。

目をうろうろ動かすと、体育館の玄関に立っているおじいさんと目が合いました。

のぞむくんが学校から帰った時に、おかえり、と言ってくれていた、五軒となりに住んでいたおじいさんです。よく、板で机やイスをつくっていた人です。

「あの人にたのもうか」

半そでの子が、言いました。

のぞむくんは、今までは返事もできなかったおじいさんに、はじめて話しかけました。

「あそこ、チューリップあるの。ふまれないように、囲ってくれますか？」

おじいさんは、白いヒゲが伸びたあごをなでて、目を細めました。「そうだな。道具をかりてくるよ。のぞむくんは、マジックをかり

てこれるかな？ 看板も作ろう」

こうして、体育館の入り口近くに、小さな花だんが出来ました。それから毎日、のぞむくんはチューリップを見ていました。

ほこりだらけになった上着がいなくなったところ。外に出たのぞむくんは、いつものように花だんの前に行きました。そして思わず「わぁ」と、声をあげました。その声に、水をくンできたおばあさんが足を止めました。のぞむくんは、おばあさんに言いました。

「さいたよ！」

まっすぐにのびた茎の上で、コップのような花が重たそうにゆれています。

赤色があります。黄色もあります。白くて、ふちがピンク色なもの、もうすぐさきそうです。

芽がでた十個全部がさきそろってはいないけれど、おひさまの光をあふれるほどためています。

「やったね」

いつの間にかそばに来ていたあの子も、うれしそうに笑いました。おばあさんも、みるみる目をかがやかせて、手を合わせました。

「おやまあ、ほんと、きれいだねえ」

次々と、周りに人がふえてきました。みんな、さいた花を囲んで、口々に喜びを言葉にしました。

だれかが、小さく、

「さーいーた、さーいーた」

と、チューリップの歌を歌い始めました。となりの人も歌い始め、だんだんと大きな声で、最後にはみんなでくり返し合唱になりました。歌声といっしょに、笑顔も広がっていきます。

のぞむくんも、口を開けました。

しばらく笑うことを忘れていたほっぺは、最初かたくて、上手に歌えませんでした。けれども、二回目くらいから、だれよりも大きな声で歌いました。

歌いながら、あの子の方をみると、あの子はにっこり笑って、大

きくうなずいていました。

チューリップを見て、のぞむくんがもう一度あの子をふり返ったとき、その子はそのにいませんでした。

きよろきよろさがすのぞむくんに、あの子の声が聞こえました。

「ここでのぼくの仕事はおしまい。次のところへ行くね」

取り残されるようで、のぞむくんは立ちつくしました。

その肩に、だれかの手がのせられて、のぞむくんは手の先を見上げました。五軒となりだったおじいさんが、のぞむくんの頭をやさしくなでました。

のぞむくんは、チューリップをみているうちに、その向こうの景色へ目を移していきました。久しぶりに見る、海です。

建物のなくなった町の向こうで、海はおだやかに光っていました。

（後書き）

ヒロシマ・ナガサキ、神戸などに笑顔が戻ったように、今回の被災地の方々のもとにも、一日も早く笑顔が戻りますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6291r/>

のぞむくんのチューリップ

2011年4月5日21時10分発行